

**横浜市立 横浜市立永野小学校 学校評価報告書 (令和4～6年度)**

重点取組分野	令和4年度		総括	重点取組分野	令和5年度		総括	重点取組分野	令和6年度		総括
	具体的取組	自己評価結果			具体的取組	自己評価結果			具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①学習における支援児童の把握を的確に行い、教科・領域のもつ価値と教師の手立てを一致させることで、全児童の学習に対する意欲を高める。②各教科の基礎基本の定着はもたらぬこと、子どもたちが日常で直面するであろう問題を自分事としてとらえ、解決できるような能力を高めるため、問題解決的学習の充実を図る。	特に国語科で、豊かな語彙と表現を獲得し、考えをつなげる子どもを育成を目指して指導してきた。配慮や手立てのもと、児童の学習の関わりの中で表現しようとする意欲が高まったが、豊かな語彙を獲得し、自由にそれを使えるまでには至っていない。日常の中で進んで高め合う児童の対話的で深い学びや、コミュニケーション能力の向上が求められる。	B	確かな学力	①引き続き、学習における支援児童の把握を的確に行い、教科・領域のもつ価値と教師の手立てを一致させることで、全児童の学習に対する意欲を高める。②各教科の基礎基本の定着はもたらぬこと、子どもたちが日常で直面するであろう問題を自分事としてとらえ、解決できるような能力を高めるため、問題解決的学習の充実を図る。	進んで高め合う子どもを育て、自分の考えをもつための手立てと、その考えを表現し学び合うための手立てについて研究し、指導に生かしてきた。特に算数科で、児童の思考を想像し、「問い」を大切に問題解決型学習として教科経営することで、児童も学習に対する意欲が高まってきている部分もある。しかし、自ら考え、判断し、表現する力を身に付けているまでには至っていない。	B	確かな学力	①自ら考え、判断し、表現する力や、発信力・表現力等を身に付けられるようにしたい。教科・領域のもつ価値と教師の手立てを一致させることで、全児童の学習に対する意欲を高めていく。②各教科の基礎基本の定着だけでなく、児童が日常で直面するであろう問題を自分事としてとらえ、解決できるような能力を高めるため、問題解決的学習の充実を図る。		
豊かな心	①道徳の時間や各教科の学習、たてわり活動等、様々な教育活動において、適切な「自己表現」をした「配慮」をしたりして、友達とうまく関わり合うことができるようにする。②友達の学び合いを通して、できる喜びや達成感を味わえるような場を設定し、自信や意欲を高めていく。	道徳の時間やたてわり活動を通して、クラスや同じ学年、異学年との関わりを増やす中で、自らの意見や考えを相手に伝えられるよう、教科と連携して語彙を増やし、振り返りをしてきた。また友達との学び合いの中で、お互いの考え方をノートを交換したり、ロイロで共有したりして達成感や意欲を高めていく。	B	豊かな心	①道徳の時間やたてわり活動を通して、同じ学年の友達との考えや異学年の友達との考えを受け入れつつ、自己の考えを適切に表現し、関わり合うことができるようにする。②友達の学び合いを通して、できる喜びや達成感を味わえるような場を設定し、自信や意欲を高めていく。③どの教科においても共通の学びの場を取り入れ、互いの考えのよさを確認し合えるようにした。	①年間計画をもとに道徳の時間を実施し、さらに教育活動全体を通して豊かな心の育成を行うことができた。また、たてわり活動では、異学年交流を通して協力をすることの大切さを理解し、お互いに思いやる心ができた。②どの教科においても共通の学びの場を取り入れ、互いの考えのよさを確認し合えるようにした。	B	豊かな心	①たてわり活動や人権週間の取り組みなど、児童会活動の充実を進める。②「特別の教科 道徳」を要として、道徳教育を推進し、全教員が参画して取り組める体制を整える。③ 幼保小連携事業、小中交流事業や地域との交流など、交流や体験活動を充実させていく。		
健やかな体	①体育の学習で自分の課題を確認する時間を設け、その課題を解決するためにめあてをもてるように支援する。②見通しをもって主体的に運動や健康の学習に取り組むことができるようにする。③運動委員会主催の集会などを設定し、目標をもって意欲的に運動に取り組めるよう適切に支援していく。	①ICTを活用した学習を通して、課題把握や解決ができるように支援した。「コソ線」というアプリで自分の動きを確認し、よい動きと比べることができた。②ダンスや短縄などを全校で取り組み、運動に取り組んだ。短縄カードを使い、目標と達成度が分かるようにした。	B	健やかな体	①体育の学習で自分の課題を確認する時間を設け、その課題を解決するためにめあてをもてるようにする。②見通しをもって主体的に運動や健康の学習に取り組むことができるようにする。③運動委員会主催の集会などを設定し、目標をもって意欲的に運動に取り組めるようにする。	①ICTを活用した学習を通して、課題把握や解決ができるように支援した。②学習資料を共有することや他校との情報交換を行うことができた。③モジュール学習の設定を考慮し、技能の向上と主体的に取り組む態度を養うことができた。④異学年交流を目的とした鬼退治を企画、運営し、体を動かす楽しさを感じることができた。また、短縄や長縄を全校で取り組み、体力や技能の向上、目標を目指す姿が見られた。	B	健やかな体	①体育の学習で自分の課題を確認する時間を設け、その課題を解決するためにめあてをもてるようにする。②見通しをもって主体的に運動や健康の学習に取り組むことができるようにする。③通年を通した運動に親しむイベントを企画、運営し、体を動かす楽しさを感じ、体力の向上を図る。		
自分づくり(キャリア教育)	①「キャリアパスポート」「マイスター体験」を中心に、地域の材で体験的に学ぶ機会を設け、他者との関わりの中で一人ひとりの自己有用感を高めるようにする。②学年に応じて、外部講師や企業と関わる活動を年間計画に位置付け、学ぶことや働くことの意義を考える場を設定する。	①総合的な学習の時間を中心として、地域の材と積極的に関わり、地域のよさに気づいたり、自己有用感を高めたりした。②各学年では、地域の商店や外部と関わりをもち、その方たちの仕事に対する思いを知り、ひとつのことを極めたいことの難しさや素晴らしさを学ぶことができた。	B	自分づくり(キャリア教育)	①地域の材を中心にいろいろな人と関わる機会を設け、他者との関わりの中で一人ひとりの自己有用感を高めるようにする。②各学年やクラスでの活動の中で、地域や外部の方と積極的に関わる機会を設け、進んで関わりをもち、学習を深めることができた。	①総合的な学習の時間を中心に、地域や人と積極的に関わった。課題解決学習を進めたい中で、自己肯定感や自己有用感を高めることができた。②各学年やクラスでの活動の中で、地域や外部の方と積極的に関わる機会を設け、進んで関わりをもち、学習を深めることができた。	B	自分づくり(キャリア教育)	①地域の材を中心に人やものと関わっていく中で、一人ひとりの自己有用感を高めるようにする。②各学年の実態に合わせたキャリア発達計画を捉え、外部講師や企業と関わる活動を年間計画に位置付け、総合的な学習や特別活動をはじめいろいろな教科の学習の中で課題に取り組む。		
いじめへの対応	①毎月の児童指導部会およびいじめ対策委員会全体会で、児童理解や事業についての情報を共有し、いじめの未然防止・早期発見、子どもや保護者の意向に寄り添った丁寧な対応に努める。②いじめ認知基準の確認を常に先行し、いじめに対する態度を高め、些細なことでも積極的にいじめ認知をしていく。③Y/PuzzleY/Pアセスメントシートを活用した校内研究を通して、進んで関わり合う子どもを育て、いじめのない学級風土をつくり出していくことができるようにしていく。	①毎月の定例会、児童指導部会、臨時会の3種類のいじめ対策委員会を設けた。毎月の定例会では、全職員が4月から継続して当月に起きた出来事すべてを集約し、確認する時間を設けた。よって認知するまでの案件も見逃さず、対応が終結するまで全職員で見守ることがスタンダードになった。②いじめ認知のハードルを下げることを意識した。全職員がいじめを認知することを恐れず、大切なはいじめへの対応であって、避けたいのは見落としなどという意識を常にもってらした。丁寧に対応していくことはいじめの重大事案は発生せず、初期対応の大切さが数字に反映されている。	A	いじめへの対応	これからも、いじめについての認知のハードルを低くもっていき、見逃し、見落としこそ重大事案にならないことを気を付けるように専任をはじめ、各部署、TM教員が意識する。児童のいじめ解決についての認識も、加害、被害の特定ではなく、お互いの関係を築いていくことを大切にしていきたいことが問題を大きくこらせないことを伝えていく。	①毎月の全体児童指導部会定例会、臨時会の3種類のいじめ対策委員会を設けた。毎月の全体会で、全職員が4月から継続して当月に起きた出来事を集約し、確認する時間を設けた。よって認知するまでの案件も見逃さず、対応が終結するまで全職員で見守ることがスタンダードになった。②今年度もいじめ認知のハードルを下げることを意識した。全職員がいじめを認知することを恐れず、大切なはいじめへの対応であって、避けたいのは見落としなどという意識を常にもってらした。丁寧に対応していくことはいじめの重大事案は発生せず、初期対応の大切さが数字に反映されている。	A	いじめへの対応	①引き続き毎月の全体児童指導部会定例会、臨時会の3種類のいじめ対策委員会を設け、迅速に対応していき、いじめを認知するのと同時に、全職員で情報を共有できるようにしていく。②職員がいじめ認知に対する意識が高まっているので、それを維持しつつ、学年やブロック、全職員などの様々なユニット内での情報共有の流れをスムーズにいくことをより意識していくことで、見落としの案件が出ないようにしていく。		
特別支援教育	①個別の教育支援計画・指導計画の作成とそれに基づいた特別支援教育や事業についての情報を共有し、いじめの未然防止・早期発見、子どもや保護者の意向に寄り添った丁寧な対応に努める。②いじめ認知基準の確認を常に先行し、いじめに対する態度を高め、些細なことでも積極的にいじめ認知をしていく。③Y/PuzzleY/Pアセスメントシートを活用した校内研究を通して、進んで関わり合う子どもを育て、いじめのない学級風土をつくり出していくことができるようにしていく。	①個別の指導支援計画・指導計画を作成し、それぞれに児童への支援の仕方考え、実行することができた。②個別級児童の実態を捉え、一斉学習、小グループ学習など学習形態を考えた学習することができた。交流線との連携をはかり、個別級の児童が気持ちよく教室に入ることができるよう支援した。③「ハートフル永野」の開設により、居場所を作ることができた児童が増えた。児童の情報共有ができたが、さらに有効な手立てを連携して考えることでの連携が必要だと感じた。	B	特別支援教育	①個別の支援計画・指導計画を保護者とともに作るという意識で、アセスメントをしっかり行い、活用していくようにする。②個別支援級の児童についての理解、人権についての理解を深められるような職員研修や学習を取り入れている。③「ハートフル永野」に在籍する児童の学習の仕方、そこからの支援の仕方について考えていく。④一般級において特別な支援が必要な児童について、特別支援委員会などで継続して支援のあり方を考えられるようにしていく。	①個別支援計画・指導計画を作り、入学年度ごとに個別に支援が必要な児童に対して、個別の配慮メモというファイルを作成した。引継ぎ事項などが明確に分かるようになった。②個別級の児童や国際教室に通っている児童について職員間で理解ができるように研修を行った。③④「ハートフル永野」に在籍する児童の支援については、把握することができなかったため、どのような形で考えて行くのか明確化していきたい。	B	特別支援教育	①個別の配慮メモを活用し、支援が必要な児童に対して継続的に支援ができるようにしていく。②特別支援教育について、保護者の理解を得られるように啓発活動をしていく。③個別支援の必要な児童に対する理解を深める研修を行う。④「ハートフル永野」に在籍する児童や特別な支援を必要としている児童についての支援について職員間で共通理解することが必要だと感じる。		
児童・生徒指導	①学校の約束を基に、子どもへの指導を全職員で共通実践し、誰もが安心して安全に過ごすことのできる学級・学校の環境を整える。②生活目標や人権委員会などで、友達との関わり合い方について考える機会をつくっていく。③多様化する事業に対して、チームで協力し、連携を取り合って対応していく。	①児童指導では全職員が児童が起こした問題行動をみるのではなく、その奥にある本音の問題、困り感、苦しみを読み取れるように日々、研修をつんだ。特別講師を招き研鑽に励んだ。②各学年、部会が工夫し、児童にわかりやすい人権を考える時間を設けた。③多様化する事業にはチームで取り組めた。SC,SSW、子家、児相など学校との連携を意識し、単独判断はしないことを意識した。結果的にSSW稼働は横浜では2番目と実績ももたっている。	A	児童・生徒指導	組織で取り組む、専任、管理職を中心に、担任、級外、TM、SC、SSW、子家、児相、各関係機関をうまく活用し、学校だけでなく、地域や関係機関と連携し、情報共有が担いどよりなように風通しの良い情報共有を恐れないようにする。	①児童指導では全職員が児童が起こした問題行動をみるのではなく、その奥にある本音の問題、困り感、苦しみを読み取れるように日々、研修をつんだ。特別講師を招き研鑽に励んだ。②各学年、部会が工夫し、児童にわかりやすい人権を考える時間を設けた。③多様化する事業にはチームで取り組めた。SC,SSW、子家、児相など学校との連携を意識し、単独判断はしないことを意識した。	A	児童・生徒指導	①学校の約束を基に、子どもへの指導を全職員で共通実践し、誰もが安心して安全に過ごすことのできる学級・学校の環境を整える。②生活目標や人権委員会などで、友達との関わり合い方について考える機会をつくっていく。③多様化する事業に対して、チームで協力し、連携を取り合って対応していく。		
地域連携	①学校運営協議会と地域協働本部の設置により、実効性のある地域連携と学校協力の関係を実現する。②地域清掃や夏祭りなど、地域の行事に子どもや教職員が積極的に参加することで、地域と学校とのつながりを密にしていく。③学校HPを充実させ、積極的に情報発信をしていく。	①後期から、学校運営協議会と地域協働本部を設置し、新たな地域連携と学校協力の仕組みを整えることができた。②コロナ禍の影響で、地域行事がまだ停滞している状態であったが、連合町内会の運動会などには協力できた。③学校HPは、後半になって頻りに更新されるようになったが、さらに積極的に発信していく。	B	地域連携	①学校運営協議会と地域協働本部を核とした地域連携と学校協力体制をさらに実効性のあるものにしていく。②復活してくる地域行事に、子どもや教職員が積極的に参加できるようにしていく。③学校HPは、組織的に運営できるようにしていくと共に、学校YouTubeチャンネルの開設を行い、積極的な情報発信をしていく。	①学校運営協議会の活動は軌道に乗ったが、地域諸団体への地域協働本部の位置づけの周知がまだ遅く、主体的な活動の展開や有効な予算執行が不足していた。②永野連合町内会夏祭りや運動会、上永谷町内会演奏会、永谷川水辺愛護会のクリーンアップ作戦と様まつり、永谷の春の音の会など、多くの地域行事に子どもや教職員が参加することができた。③学校YouTubeチャンネルの開設は有効で、効果的では至っていない。	B	地域連携	①地域学校協働本部と関連諸団体との位置づけを明確にして周知し、協働本部の主体性とカバンス力を強化する。②地域行事との相互協力関係を維持するとともに、持続可能な関係性の構築をしていく。③教育DX化の急速な流れの中で、学校HPとYouTubeチャンネルの役割をしっかりと定める。		
安全管理	①各防災・防犯訓練や交通安全教室を通し、日常的に自分の身は自分で守り、安全に行動できるようにする。②毎月の安全点検を確実にし、子どもの安全を軸に、必要に応じて設備の修繕・保守をしていく。	①計画的にすべての避難経路を確認し、訓練することができた。命を救うために事前指導を行うことができた。短い時間で避難することができた。②技術員や管理職と連携を取り、子どもの安全を守るために修繕・保守をすることができた。	B	安全管理	①各防災・防犯訓練や交通安全教室を通し、日常的に自分の身は自分で守り、安全に行動できるようにする。②毎月の安全点検を確実にし、子どもの安全を軸に、必要に応じて設備の修繕・保守をしていく。③交通安全推進校として、データをもとにした取組を行う。	①計画的に避難経路の確認や訓練の実施ができた。短い時間で避難することができた。事前指導、事後指導を通して訓練の大切さを伝えることができた。②技術員と管理職と連携し、子どもの安全を守るために修繕・保守に努めた。③各学年での実施をはじめ、データを基に様々な取り組みを行った。作成した安全マップは、総合的な学習の時間でも活用され、交通安全に対する意識を向上させることができた。	A	安全管理	①各防災・防犯訓練や交通安全教室を通し、日常的に自分の身は自分で守り、安全に行動できるようにする。②毎月の安全点検を確実にし、子どもの安全を軸に、必要に応じて設備の修繕・保守をしていく。③交通安全推進校の取り組みで作成した安全マップを地域に発信して活用していく。		
人材育成・組織運営(働き方)	①6年次以下の教職員を中心にメンターチームを組織し、ミドルリーダーが講師としてサポートしつつ、外部講師を招かない授業研を行い研究のすみ化を図る。②学年研究会やブロックでの話し合いの充実を図りながら、中・高学年では一部教科担任制を導入し、「授業」と「児童指導」について、常に話し合える環境をつくっていく。③会議において、協議事項と連絡事項を事前に整理し、議題精選を徹底することで、効率的に話し合いを進められるようにする。	①メンターチームや重点研究などにおいて、指導委づくりや授業について指導要領を根拠にした学び合う姿が多く見られた。中・高学年においては、一部教科担任制を行ったことで、それぞれの学級が抱える課題解決を学年で行うことができた。多くの目で児童支援ができた。②たき台を用いて、多くの目で児童支援ができた。③たき台を用いて、多くの目で児童支援ができた。④会議の時間短縮が図れた。	A	人材育成・組織運営(働き方)	①6年次以下の教職員を中心にメンターチームを組織し、ミドルリーダーが講師としてサポートしつつ、外部講師を招かない授業研を行い研究のすみ化を図る。②学年研究会やブロックでの話し合いの充実を図りながら、中・高学年では一部教科担任制を導入し、「授業」と「児童指導」について、常に話し合える環境をつくっていく。③会議において、協議事項と連絡事項を事前に整理し、議題精選を徹底することで、効率的に話し合いを進められるようにする。	①メンターチームでは、リーダーを中心に自分たちの学びたい事項を年度当初に明らかにし、校内の職員を講師として招聘し、実践に生かせる活動を行った。②重点研ではブロックごとに検討・事後研究会を行い、学び合う姿が多く見られた。また、一部教科担任制を行い、学年全体で児童支援ができた。③各種会議では、議題の精選を行い、短時間で効果的な会議となるように努めた。	A	人材育成・組織運営(働き方)	校内OJTをより一層推進し、メンターだけでなく、各キャリアステージに応じた力量の向上を図っていき、今後の学校運営の中核を担う人材の育成も同時に行っていく。校務のICT化の推進、各種会議の内容の精選を行い、時間対効果が高まるように意識して職務にあたる。		
ブロック内評価後の気づき	・今年度は、コロナ禍も落ち着きつつあり、少しずつ以前のように情報の共有ができる状況が整ってきた。9年間で育成を目指す資質・能力として(自分づくりに関する力)(問題発見・解決能力)(言語能力)の3つを再確認させてきた。・ブロック内の小学校と児童の実態に隔りがあることや、ブロック内での情報交換を密にしている必要性や具体的な連携の取り方を確認することができた。また、中学校で一緒になったときに、たくましく生きていく力を育てていく必要性を感じた。		ブロック内評価後の気づき	○今年度は、小中総務会を3度行い、情報共有をすることができた。その中には、各校の実態を踏まえながら、9年間で育てる子ども像の具体を共有した。具体的には、<言語能力><問題発見・解決能力><自分づくりに関する力>を目ざす資質・能力として確認することができた。○ブロック内で子ども同士や教職員の関わりを密に行うことの必要性を感じた。校種に関わらず互いに授業参観を行ったり、中学校職員が小学校で授業を行ったりするなどの交流をすることで、ブロックでの関係性を高めたり、小中のスムーズな移行につながると思う。		ブロック内評価後の気づき	・今年度は、「特別支援教育が特別でなくなるように」というスローガンのもと、ハートフル永野の充実と児童指導体制の組織化を自主として取り組み、一定の成果を上げたことと評価できる。特に、いじめへの早期発見・早期対応や不登校・不適応児童への個別に寄り添った対応において、組織的で組織的に体制を維持することができた。保護者アンケートからもその手応えを読み取ることができた。これを支えたものは、国際教室の新規設置、特別支援教室実践推進校としての非常勤講師の配置とチーム学年経営配置校としてチームマネージャーを置き、毎週のTMネットワーク会議の開催がある。今後もこのシステムを維持することで、安定した児童指導体制を継続していきたい。		ブロック内評価後の気づき		
学校関係者評価	・コロナ禍で削減されていた学校行事も徐々に再開され、学校に活気が戻ってきている。行事の内容については今後も時代に合わせ「変化していくことが大切である」と感じた。周年行事やフェスティバルなどでは、教師と児童が共に計画を進め、当日も児童が活躍している姿から成長を感じた。授業では、情報機器を発達段階に応じて活用している姿があり、時代の変化を感じている。人材育成の点で、地域と学校を繋げる取組ができればと思う。特別支援教育について、よい取り組みを行っていると感じるが、その内容等の発信については、今後の工夫が必要であると思う。		学校関係者評価	学校行事などもコロナ以前のものになるなか、さらに精選、継続、改善、縮小など時代の変化や様々な視点で考えられ、「子どもにとって何が大切なのか」を吟味した上で実践し、学校に活気が戻ってきている。行事の内容については今後も時代に合わせ「変化していくことが大切である」と感じた。これまでの児童が実践していた「あいさつ」について、少々下降気味であると感じている。地域の大人が率先して行うなどし、子どもの良い手本となるように意識していくことが大切であると考え。特別支援教育について、よい取り組みを行っている。少しずつ保護者や地域の方々にも取り組みの内容等が理解できていくと嬉しい。		学校関係者評価			学校関係者評価		
中期取組目標振り返り	コロナ禍3年目を迎えた今年度は、「何ができるか、どうしたらできるか。」を考えながら、少しずつ本来の教育活動を取り戻すための扉を開いていく一年であった。その結果、今後、持続可能な新たなスタイルを発見したり気づいたりすることができた。特に、創立130周年記念事業を子ども中心の活動に据えることにより、より豊かな取り組みを年間を通じて展開することができたことは、とても意義深いものであった。また、「ハートフル永野」の開設により、心に大きな課題や困り感を抱えている児童に寄り添うためのシステムを構築し、特別支援教育の一般化・標準化の重要性を認識した一年であった。		中期取組目標振り返り	今年度は、「特別支援教育が特別でなくなるように」というスローガンのもと、ハートフル永野の充実と児童指導体制の組織化を自主として取り組み、一定の成果を上げたことと評価できる。特に、いじめへの早期発見・早期対応や不登校・不適応児童への個別に寄り添った対応において、組織的で組織的に体制を維持することができた。保護者アンケートからもその手応えを読み取ることができた。これを支えたものは、国際教室の新規設置、特別支援教室実践推進校としての非常勤講師の配置とチーム学年経営配置校としてチームマネージャーを置き、毎週のTMネットワーク会議の開催がある。今後もこのシステムを維持することで、安定した児童指導体制を継続していきたい。		中期取組目標振り返り			中期取組目標振り返り		